巻頭言

老会員のささやき
Old member talks to himself 室町 繁男*
Shigeo MUROMACHI*

名誉会員に推挙された感想などを巻頭言に書くようにとの事務局からの依頼があつた。学会役員の方々の御厚意並びに会員各位の御協力の賜と厚く御礼申し上げます。しかし改めて感想はと問われると異様な感に打たれる。確かに名誉であり有難いことだが、反面言うに言われぬさびしさを覚える。近く古稀を迎える年齢となつたのだから止むを得ないが、幸い健康に恵まれ、まだまだやりたい仕事が沢山あることに気がつく。然し、計画だけはやるが、自ら手を下して試験をやる気力が、力が衰えて来たように思われてならない。さてどうすればいいのだろう。

大学という所はこの点良き住家である。学生を激励し、もつばら好きな研究がやれるし、その成果を期待されることもない。おしむらくは、折角信頼できるデータが得られる頃になると卒業で、お次き交代ということになる。それはいいとして我々教官の方である。いつまでも大学の席を汚すわけにはいかない。大学にも定年制があつて、国立大学では60~65歳で退官ということになる。私立大学でもせいぜい70歳止まりだろう。これでは困ってしまう。

近年我が国独自の技術開発が叫ばれている。その責任の一端は大学のあり方にあると言えよう。大学では論文の質でなく、数で研究実績を評価している所が多い。そのため論文になり易いテーマを選ぼうとすることは自然であろう。論文には理学又は工学と技術的工学に分けられると言う。前者は人手と金もかからず論文になり易い。後者は設備費、予算、人件費がかかり、然も年数がかかり論文になりにくい。然し、現実に要求されるのは、むしろ技術的工学で、この方面の研究が盛んになれば技術開発が促進されることになろう。

ちなみに国立大学の一講座当りの年間予算は正味200万~500万前後だろう。これでは何も出来ない。我が国には多くの優れた基礎的な研究がなされているが、皮肉にも世界中を回り回つて技術的研究成果として逆輸入されるケースが多い。これは何かが欠けているのだ。研究費が適切に使われないためか。熱意が欠けているためか。どうすればいいのだろう。

大学では教授のポストを得るのに問題があるようだが、一度そのポストをつかめば安泰だ。極言すれば、何もせずに定年まで過せる。よく大学の教官はぬるま湯に足を突込んだようなものだと言われるゆえんはここにあると言えよう。この点海外の大学教授の生き方を参考にしたらどうだろう。折角の人材、宝の持ちぐされにならないようお互いに気をつけたいものだ。

* 千葉工業大学教授、富山大学名誉教授

思えば45年間の研究生活の中、30年間は富山大学工学部で過したことになる。昭和26年富山大学に赴任したわけであるが、この年は北陸軽金属工業KK（現ホクセイアルミ）でセコハンのプルオーバーミルを用いた北陸ではじめてアルミニウムの圧延試験が行われた記念すべき年であつた。これは現三協アルミニウム工業KK竹平会長と森永先生の間で計画されたとのことであるが、これにより家庭器物の生産が一段と増強されたことになり、その生産者と日本のトップに立つに至つたと思う。以後、圧延設備の増強、三協アルミニウム工業KKの設立、更に押出機によるアルミニウムサッシの生産へと転換して行つた。YKKもファスナーから更にアルミサッシの生産に入り、これら富山県内のサッシの総生産高は日本一を誇るに至り、今日に及んでいる。当初は各企業間には試験研究設備は殆んどなく、従つて大学の設備を開放、協力することができた。勿論、私ども各企業から研究試料の提供を受け、いわゆる産学協同の実を挙げることができたと思つている。それには各企業幹部の理解があつたわけで、その点恵まれた環境にあつたと感謝している。やがて軽金属学会北陸センターの発足となり、地元軽金属学会々員も予想以上に増加、地区会員の講演会も積極的に行われ、全国大会も2回盛会裡に開催することができた。このことがまた名誉会員に推挙された原因となつたものと思います。

降雪の多い北陸の地にアルミニウム企業が次々と設立され、全国に誇るに至つた原因は何であつたのだろうか。不思議に思われてならない。私は企業も大学も一丸となつて努力した執念以外何のものでもないと思つている。一つの目標を決めたら必ず成し遂げる執念ほど尊いものは外にないような気がする。

私は昭和54年定年退官になりましたが、それまでの10年間工学部長の激務の中にありました。、必ず年一論文掲載されるよう努力し実現してきました。これも一重に産学協同の賜と感謝しています。

現在千葉工業大学で修論、卒論の指導をやりもつぱら新技術の開発などに関係することができ、結構楽しく過しています。

春、秋2回の軽金属学会講演会には欠かさず出席するようにしています。一つは、毎年どのようなテーマが選ばれ、どのような方向に研究が進められているか知りたいためです。一つは、若い研究者がどのような器機を用い研究を進めているか、年々歳々新しい高度な測定器機が開発されていく中で、それを自由に駆使している姿を見て頼もしく思い、固定化した考え方に一抹の淳風を与えてくれる楽しみがあるからです。

軽金属学会は、非常に家族的と申しますか、和気あいあいの所が他の学会に見られない良さがあり、好きです。しかも同じ方向に進む研究者ばかりだし、又その数も少なく、お互いによく知りあえる所がよいのではないだろうか。判らない所はざつくばらんに相談でき教えてもらえる有難さです。私達はこのすばらしい学会を会員全員で盛り上げていきたいものです。アルミニウム精錬の200t突破も真近かつた頃に比べ、学会活動も自然とにぶりがちにならざるを得ない。このため、維持会員の増強を計っているが、しかしアルミニウム並びに関連企業がもつと景気がよくならないことには、これもはかばかしくいかないだろう。景気は世界のすう勢とあきらめずに、会員各位の研究開発活動が企業の隆盛に関係するものと信じ、社会のニーズにマッチした新技術開発に邁進すべきと思う。このことが結局企業の発展、学会の隆盛に直結するものと思われる。一方、学会企画委員会あたりで今後我が国が開発すべきテーマなどを広く周知させることも必要かと思ひます。種をまけば何れ芽が出、大木となるはず。

最近のアルミニウムの価格の変動、これは何に起因しているのだろうか。人為的に簡単にアルミニウムの需給バランスをくずすことができるようでは、まだまだアルミニウム企業の経済力は弱いように思われてならない。さればこそ、互いに大局に立つて協力し、新技術開発に邁進すべきだろうと思われる。